

研 究

幼児期から青年期における子どもの外在化問題行動 と夫婦ペアレンティングの関連

加藤 道代, 神谷 哲司

〔論文要旨〕

夫婦がともに子育てを行う（夫婦ペアレンティング）にあたり，母親の認知する子どもの外在化問題行動と父親の育児関与が，母親による父親の育児に対する調整行動（促進，批判）および父親が認知する育児関与に及ぼす影響を検討した。オンライン調査により第一子が2～17歳の夫婦2,328組のデータを収集し，共分散構造分析を行った結果，子どもの外在化問題行動は，母親による父親の育児に対する促進を低減させ，批判を高めていた。母親による父親の育児に対する促進は，父親の認知する育児関与を高め，それを見た母親はさらに父親の育児に対する促進を高め批判を低減するという夫婦ペアレンティングの循環が認められた。一方で，母親による父親の育児に対する批判は，父親の認知する育児関与に必ずしも有効ではなかった。

Key words : 夫婦ペアレンティング, 外在化問題行動, 父親の育児関与, 家族システム

I. 問題と目的

親にとって子どもを育てることは，他に代えがたい喜びとなる一方で，子どものケアや対応にあたり，さまざまな試練に直面しなければならない。その過程では，必ずしも思うとおりにはない制約も生じる。しかし，夫婦を対象に行われた調査では，子育てによる制約感には必ずしもネガティブな面ばかりではなく，親としての発達意識を高めること，また，一方の親の発達意識の高まりは，パートナーの発達意識を高めるという影響関係が確認された¹⁾。このことから，試練も喜びも含め，父親と母親がともに子育てに携わることは，夫婦間の相互作用を通じて，夫婦，ひいては家族の発達的変化のためにも重要と考えられる。

欧米では，複数の養育者がともに子育てをすることを coparenting と呼んでいる。本来 coparenting は，法的な夫婦関係に限定されない概念であるが，日本の子育ては夫婦の間で行われることが多いことから，加

藤ら²⁾は，わが国の夫婦の間で行われる coparenting を夫婦ペアレンティングと呼んだ。そして，ふたり親家庭において母親が父親の育児に対して行う調整行動を測定する夫婦ペアレンティング調整尺度を作成した。それにより，母親は，父親の育児関与に対して，支持，激励を中心とした“促進”（例：「夫に相手をしてもらっていることで，子どもがとても喜んでいて夫に伝える」，「子どもの相手をしてくれてありがとうと夫に伝える」）と，拒否，非難を中心とした“批判”（例：「子どもに対する夫のかかわりで気に入らない行動を他の人に話す」，「夫がやっていることを取り上げて，自分のやり方でやる」）を行っていることがわかった。また，このような母親の調整行動に関する父親と母親の認知を個々に尋ねたところ，いずれの回答においても，父親の育児を促進する支持的な働きかけが高いほど，父親の育児関与，育児協働感，夫婦関係満足感が高く，母親から父親への批判が高いほど，育児協働感および夫婦関係満足感低いことが示されている。

Children's Externalizing Behaviors and Coparenting in Families with Infant to Adolescent Children [2911]

Michiyo KATO, Tetsuji KAMIYA

東北大学大学院教育学研究科（研究職）

受付 17. 2. 20

採用 17. 8. 28

神谷³⁾によれば、子育て期の夫婦に関する日本の先行研究は、①夫婦関係満足感、②家事・育児分担と性役割観、③コミュニケーションや親密性など夫婦の関係性、④ワーク・ライフ・バランス、⑤夫婦関係と子育て意識や態度との関連、⑥夫婦関係が子どもの発達に及ぼす影響の6領域に整理される。これらの研究は、概ね「夫—妻」としての役割および関係性と子育てとの関係であり、父親や母親としてどのようにとも子どもと向き合うかという観点ではない。この点について家族システム論では、「父親—母親」関係は、「夫—妻」関係および「父（母）親—子ども」関係とは区別されたサブシステムとしてとらえられている⁴⁾。それは、夫婦関係と父母関係は、同一人物間でありながら別の役割間に生じており、子どもの発達や家族システムに独自の影響力を持つからである。したがって、「夫—妻」役割間の先行研究が多い日本においても、「父親—母親」関係として、ともに子育てを行うこと（以下、夫婦ペアレンティング）に関する知見の蓄積が必要とされよう。

加えて、夫婦関係が子どもの発達に及ぼす影響は検討されているが、逆に子どもが親の感情や行動、精神的健康に及ぼす影響に関しては、母親が研究対象となることが多く^{5,6)}、母親を介して父親の子育て関与に及ぼす影響を検討したものはほとんどない。平成27年4月より開始された「健やか親子21」（第2次）では、育てにくさを感じる親に寄り添う支援が重点課題となっていることから、子どもに関する要因が父親を含めた家族に与える影響を考えることには意味があるだろう。

この点について欧米では、子どもが気質的に扱いにくいほど夫婦ペアレンティングはよりネガティブであるという報告がみられ^{7,8)}、育てる子どもの状態や行動傾向が夫婦ペアレンティングに影響を及ぼす可能性が示唆されている。子どもの問題行動は、反抗挑戦的行動、多動や不注意などによる外在的問題行動と、抑うつや不安から生じる内在的問題行動が挙げられるが、特に外在化問題行動の高さは、養育者の育児負担感、社会的活動の制限、子どもに対する否定的な感情の高さのそれぞれとの間に関連があ

ることが指摘されている⁹⁾。一方、父親による育児への関与の程度が夫婦ペアレンティングの質を高めることを示す研究結果もあり^{10,11)}、母親が子育てに困難を感じる場合にも、父親は重要な役割を果たすことが推察される。

これらを踏まえると、母親の認知する子どもの外在化問題行動および父親の育児関与の程度が、母親による父親の育児に対する促進あるいは批判という調整行動の多寡に影響を及ぼし、さらに、母親によるそれらの行動が、父親の認知する育児関与に影響を及ぼすのではないかと考えられる。そこで本研究では、これらの影響関係を仮説モデルとして設定し、夫婦のペア回答を用いて検証することを目的とした。

なお、本調査の対象については、第一子が2, 3歳群（幼児期）、7, 8歳群（児童期）、13, 14歳群（青年期前期）、16, 17歳群（青年期後期）の子どもをもつ夫婦4群とすることで、子どもの発達時期における差異についても検討を加え、長期的な子育てを視野に入れた夫婦ペアレンティングの姿を検討するための基礎資料としたい。

II. 方 法

1. 調査方法、調査対象者と分析対象者、調査時期

本調査は、夫婦を対象とすることおよび第一子の年齢を統制することが、重要な目的の一部であった。また、全国からデータを収集することで地域差を排除した十分なサンプル数を確保する必要があった。そこで、これらの条件を満たすために、(株)クロスマーケティングのリサーチ専門データベースの登録モニターに対するオンライン調査を行った。第一子年齢による4群（2, 3歳、7, 8歳、13, 14歳、16, 17歳）について均等割付を行い、配偶者の協力を得られることを条件に回答を願った^{注)}。調査は2014年10月17～22日に実施され、調査に協力してくれた回答者には、調査会社を通じてモニターポイントが付与された。

夫婦間の情報に不整合のみられたサンプルを除くデータクリーニング後、計2,328組の父母（夫婦）が分析対象となった。子ども年齢による内訳は、2, 3歳群583組、7, 8歳群585組、13, 14歳群579組、16, 17歳

^{注)} ネット調査でペア回答を求めるにあたり、なりすまし回答防止への対策として、①調査依頼の際に、「配偶者への質問と回答は見ないこと」、「代理でなく本人が答えること」、「相談や意見交換を行わないこと」を明示、②父親→母親、母親→父親への回答交替の際には交替を示し、途中保存を可能とする、③先に回答した性別、交替後の性別が同じデータは分析対象外とする、④交替後の全ての質問画面に「母親（父親）の方が回答してください」と表示することによって、随時注意喚起した。

付表 夫婦ペアレンティング調整尺度 (母親用)²⁾

1. まったくない, 2. ほとんどない, 3. あまりない, 4. 少しある, 5. よくある, 6. いつもある

促進	「夫が子どもにかかわるのを、 ^{はげ} 励ましたり、 ^{うなが} 促したりするために、あなたは次のようなことをどのくらい行っていますか？」
	1 夫に相手をしてもらっていることで、子どもがとても喜んでいて夫に伝える 2 子どもの相手をしてくれてありがとうと夫に伝える 3 夫がよい親だということを、夫が聞いているときに他の人に伝える 4 夫が一人で子どもとかかわる時間を持てるようにする 5 夫をほめる (例 “あなたは私より子どもの相手がうまい”) 6 手を貸してくれるように夫にお願いする 7 子どものことについて、夫の考えを尋ねる 8 夫と子どもと一緒に過ごせるように手配や準備をする 9 “あなたはよいお父さんだ” と夫に伝える
批判	「夫の子どもへのかかわりが、あなたにとって納得できないとき、あなたは次のようなことをどのくらい行っていますか？」
	1 子どもに対する夫のかかわりで気に入らない行動を他の人に話す 2 夫がやっていることを取り上げて、自分のやり方でやる 3 怒っていることやいらいらしていることを、夫に対する態度や表情に表す 4 “あなたのしたことは間違っていると思う” と夫に言う 5 “お父さんおかしいよね” と子どもに向かって言うことで、間接的に夫に伝える 6 夫を非難する (例 “子どもの気持ちかわからないの?”) 7 ムツとして、あきれた顔を夫に向ける

群581組であった。フェイスシート情報は以下のとおりである。母親年齢:20~63歳 ($M = 40.47, SD = 6.09$), 父親年齢:21~65歳 ($M = 42.88, SD = 6.75$), 母親の就労形態:フルタイム469名 (20.1%), パートタイム675名 (29.0%), フリーランス44名 (1.9%), 未就労1,140名 (49.0%), 結婚歴:1~30年 ($M = 12.49, SD = 5.79$), 家族形態:核家族1,760名 (75.6%), 多世代同居家族568名 (24.4%), 子ども人数:1人914名 (39.3%), 2人1,168名 (50.2%), 3人217名 (9.3%), 4人26名 (1.1%), 5人3名 (0.1%) であった。

2. 測度

1) 夫婦ペアレンティング調整尺度

父親による育児関与に対して、母親がどのように対応し調整するのかを測定するために、夫婦ペアレンティング調整尺度²⁾を用いて母親から回答を得た。この尺度は、母親による父親の子育て行動への支持、尊重、激励を中心とした促進行動9項目と、拒否、非難を中心とした批判行動7項目の2下位尺度から構成されており (付表), 「1. まったくない」~「6. いつもある」の6件法で回答を求めた。促進項目と批判項目は、それぞれ合計し項目数で除した値を算出し、促進得点および批判得点とした。高得点であるほど、母親の促進あるいは批判が高いことを示す。

2) SDQ (Strength and Difficulties Questionnaire)

子どもの行動上の問題を測定するためにSDQを用いて、母親から回答を得た¹²⁾。SDQは、CBCL (子どもの行動チェックリスト) との相関が高く¹³⁾、日本においても、子どもの問題行動のスクリーニングとしての有効性が報告されている¹⁴⁾。本研究では、2~4歳用と4~17歳用の保護者版を用い、「0. あてはまらない」~「2. あてはまる」の3件法で回答を求めた。行為、多動・不注意、情緒、仲間関係、向社会性の5下位尺度のうち、行為と多動・不注意の計10項目を合計し項目数で除した値を、外在化問題行動得点とした。高得点であるほど、母親が認知する子どもの外在化問題行動の程度が高いことを示す。

3) 父親による育児関与

父親自身の育児に関する尺度は、“一緒に入浴する”, “一緒に遊ぶ” など、乳幼児期の子育て用に作成されたものが多く¹⁵⁾、各年齢の特徴に対応し、かつ今回のように幅広い年齢の子どもとのかかわりを同一尺度で測定し得る尺度は想定しにくい。しかし、第一子の発達段階を考慮した夫婦ペアレンティング全体像を把握することは、本研究の重要な目的であったため、父親に対しては“あなたは日常生活の中で、お子さんとどの程度かかわっていますか”の1項目で、母親に対しては“夫は日常生活の中で、お子さ

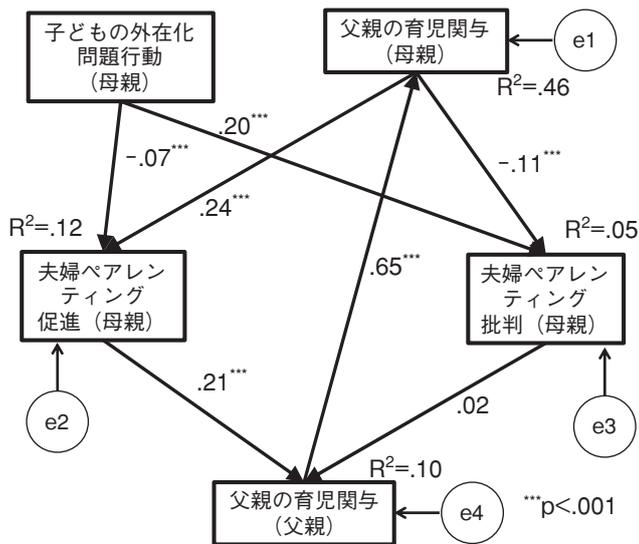


図 本研究のモデルと標準化係数

変数内の(母親),(父親)は尺度の回答者を, R^2 は重決定係数, e は誤差項を示す。

んとどの程度かかわっていますか”の1項目で尋ねた。いずれも,「1. まったくかかわっていない」～「6. いつもかかわっている」の6件法で回答を得た。高得点であるほど, 父親の育児関与が多いことを示す(以下, 父親関与)。

3. 仮説モデル, 分析方法

仮説モデル(図)として, 母親の認知する子どもの外在化問題行動および父親関与が, 母親による父親の育児関与に対する促進および批判に影響を及ぼし, さらに, 母親による促進および批判が, 父親の認知する父親関与を通じて, 母親の認知する父親関与に影響を及ぼすというパスを想定した。モデルの検証のために共分散構造分析を行い, 第一子年齢群による影響の違いを検討するために多母集団同時分析を行った。分析ソフトにはSPSS20.0 for windows および Amos20.0を用いた。

4. 倫理的配慮

本調査は, 筆者の所属先(東北大学大学院教育学研究科)の研究倫理審査委員会による審査と承認を得た(ID14-1-003)。調査は無記名方式であり, 回答の中断が可能であった。インターネット調査は, パスワード管理がされ, アクセスと入力は一ペアで1回に制限され, 回答のコピーや印刷ができないように設定された。回収調査票は生じず, 研究者は個人を特定できないため, 調査の匿名性は担保されている。

III. 結 果

まず, 各変数の基礎統計量を表1に示す。

仮説モデルの検証のために共分散構造分析によるパス解析を行った。その結果, 初期モデルの適合度は, $GFI = .998$, $AGFI = .992$, $CFI = .997$, $RMSEA = .031$ と概ね良好であった。標準化係数の値を見てみると(図), 母親の父親の育児に対する促進は, 子どもの外在化問題行動から $-.07$ と極めて弱いながら有意な負の影響, 母親の認知する父親関与から $.24$ と有意な正の影響を受けており, 母親による父親の育児に対する批判は, 子どもの外在化問題行動から $.20$ と有意な正の影響, 母親の認知する父親関与からは $-.11$ と極めて弱いながら有意な負の影響を受けていることが示された。さらに, 母親による父親の育児に対する促進は, 父親の認知する父親関与に $.21$ と有意な正の影響を与えていたが, 一方で批判は有意な影響を示さなかった。また, 父親の認知する父親関与は, 母親の認知する父親関与と高い関連を示していた($.65$)。

次に, この初期モデルについて, 第一子年齢による影響の違いを検討するために, 各年齢群について適合度を算出したところ, いずれもモデルの適合度は良好か許容できるもので, 4年齢群におけるパスの位置は一致し, 配置普遍性が確認された。子どもの年齢による多母集団同時分析の結果(表2), 母親の認知する子どもの外在化問題行動から母親による父親の育児

表1 各変数の基礎統計量

回答者	変数	平均	標準偏差	α 係数	得点範囲
母親	SDQ: 子どもの外在化問題行動	1.67	0.35	.73	(0~2)
	夫婦ペアレンティング調整行動: 促進	3.88	0.94	.92	(1~6)
	夫婦ペアレンティング調整行動: 批判	3.29	0.98	.90	(1~6)
	父親の育児関与	4.46	1.17	-	(1~6)
父親	父親の育児関与	4.35	1.06	-	(1~6)

$N=2,328$

表2 第一子年齢ごとの子どもの外在化問題行動と父母の子育て

		2, 3歳	7, 8歳	13, 14歳	16, 17歳	
		標準化係数	標準化係数	標準化係数	標準化係数	係数の比較
CP 促進 (母)	← 子どもの外在化問題行動(母)	-.07	-.14 ***	-.09 *	-.15 ***	
CP 批判 (母)	← 子どもの外在化問題行動(母)	.23 ***	.16 ***	.24 ***	.19 ***	
CP 促進 (母)	← 父親の育児関与 (母)	.17 **	.27 ***	.26 ***	.18 ***	
CP 批判 (母)	← 父親の育児関与 (母)	.01	-.21 ***	-.08	-.10 *	2, 3歳 > 7, 8歳
父親の育児関与 (父)	← CP 促進 (母)	.20 ***	.08	.15 **	.35 ***	16, 17歳 > 2, 3歳, 7, 8歳, 13, 14歳
父親の育児関与 (父)	← CP 批判 (母)	-.10	.09	-.03	.07	7, 8歳, 16, 17歳 > 2, 3歳
父親の育児関与 (母)	← 父親の育児関与 (父)	.64 ***	.68 ***	.61 ***	.67 ***	
R^2	父親の育児関与 (父)	.09	.02	.07	.19	
	CP 促進 (母)	.07	.12	.12	.13	
	父親の育児関与 (母)	.43	.46	.41	.49	
	CP 批判 (母)	.05	.05	.07	.04	

(母), (父) は, それぞれの尺度の回答者を, CP は夫婦ペアレンティング調整行動を示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

に対する批判へのパス, 母親の認知する父親関与から母親による父親の育児に対する促進へのパス, ならびに父親の認知する父親関与から母親の認知する父親関与へのパスについては, いずれの年齢においても有意な正の方向のパスがみられた。また, 母親の認知する子どもの外在化問題行動から母親による父親の育児に対する促進へのパスは, 7, 8歳, 13, 14歳, 16, 17歳で負の方向に有意であり, 母親の認知する父親関与から母親による父親の育児に対する批判へのパスは, 7, 8歳ならびに16, 17歳で負の方向に有意であり, 母親による父親の育児に対する促進から父親自身が認知する父親関与へのパスは, 2, 3歳, 13, 14歳, 16, 17歳において正の方向に有意であった。

なお, 第一子年齢の群間において, 対応するパス係数の差の検定を行ったところ, 母親の認知する父親関与から母親による父親の育児に対する批判へのパスにおいては2, 3歳が7, 8歳より有意に高く, 母親による父親の育児に対する促進から父親の認知する父親関与へのパスにおいては16, 17歳がその他の年齢群より有意に高く, 母親による父親の育児に対する批判から父親の認知する父親関与へのパスにおいては7, 8歳および16, 17歳が2, 3歳より有意に高かった。

IV. 考 察

本研究は, 母親の認知する子どもの外在化問題行動および父親関与が, 母親による父親の育児に対する促進あるいは批判という夫婦ペアレンティング調整行動の多寡に影響を及ぼし, さらに母親から父親に向けたそれらの行動が, 父親の認知する父親関与に影響を及ぼすというモデルを検証することを目的とした。その

結果, モデルは概ね支持され, 子どもの外在化問題行動は, 母親による父親の育児に対する促進をわずかながらも低減し, 批判を高めること, 母親による父親の育児への促進は, 父親の認知する父親関与を高め, それを見た母親はさらに促進を高めるとともに, 批判を低減させるという家族内コミュニケーションの循環が認められた。その一方で, 母親が父親の育児への批判を高めても, 父親の認知する父親関与を必ずしも高めるとは言えないことがわかった。これまでも先行研究は, 母親による父親の育児への批判と母親の認知する父親関与との関連は極めて低いことを示していた²⁾。ただしその結果は, 母親個人内の認知における相関関係に基づいた議論であった。これに対して本研究は, 母親と父親における個人間の認知の関係についてパス解析を用いて検討し, 母親による父親の育児への批判から父親の認知する父親関与への影響もまた極めて低いことを確認したと言える。

父親関与の高さを認知した母親が, 父親に対して支持, 激励を中心とした促進を行い, 父親も自ら育児関与を高めるという循環は, 子育てをめぐって親密な夫婦ペアレンティングが累積していく好循環と言えよう。しかし, 子どもの外在化問題行動が高く, 子どもへの対応に困難を感じた母親が, 父親の育児に対して批判を高めることは, 夫婦が二人でともに子育てを行うにあたっては必ずしも効果的とは言えないと考えられる。母親による父親の育児に対する批判が高いほど夫婦関係への満足感は低いという指摘²⁾もあることから, 子どもへの対応をめぐって生じる批判的な夫婦ペアレンティングは, 夫婦のネガティブな関係性を含む悪循環となることも懸念される。

次に、第一子年齢による多母集団同時分析を行い、子どもの発達段階の面から検討を行った。その結果、年齢群による有意な差を見ない幾つかのパスが認められた。すなわち、子どもの外在化問題行動が高いほど、母親による父親の育児への促進は低減するという負の影響、および批判は高まるという正の影響、そして、母親が認知する父親関与が高いほど父親の育児に対する促進が高まるという正の影響は、いずれの年齢群においても同方向の影響を示していた。加えて標準化係数の値を見ると、2, 3歳における子どもの外在化問題行動から母親による父親の育児への促進のパスを除き、いずれにおいても有意な値であった。従ってこれらの関係は、子どもの発達段階にかかわらず、子育てを通じて同方向に、また一定程度みられる影響関係であると考えられる。

その一方で、年齢群による差異も確認された。母親が認知する父親関与が低いほど父親の育児に対する批判が高まるという負の影響は、2, 3歳に比べて7, 8歳が有意に高かった。また、母親による父親の育児に対する促進が高いほど父親の認識する父親関与が高まるという正の影響は、特に16, 17歳群においては他のいずれの年齢群よりも有意に高かった。これらを踏まえると、子育てをめぐる夫婦間のコミュニケーションの中でも、父親の育児関与の多寡に起因した母親による父親への批判行動は、子育て初期の2, 3歳から児童期の7, 8歳に向けて変容すること、さらに、母親の促進行動の多寡が父親の認識する育児行動につながるという夫婦の相互作用パターンは、子どもの自立期へ向かう16, 17歳では他の発達時期よりも定着していく可能性がうかがえる。

本研究は、子どもの発達段階を軸に子育て期全体を大きな枠でとらえ、子どもの外在化問題行動に端を発する夫婦ペアレンティングと父親の育児関与の循環を示した点に意義がある。子どもの育ちを見る際には、夫婦を軸とした家族全体をシステムとしてとらえる視点が必要であることが改めて示唆されたと言えよう。

ただし、本研究は横断的な検討であり、第一子年齢による変化に関する解釈には慎重でなければならない。子どもの発達段階にまたがる夫婦ペアレンティングの変容として言及するには、縦断的な研究も含めたさらなる検討が必要である。また本調査は、夫婦とともに参加できる方々を対象としたため、より円満な夫婦のデータであるという可能性も考えられる。今後は、

本結果を手がかりに、各発達段階の子どもの外在化問題行動の質的差異についても焦点をあて、各段階における子育ての実態に即して丁寧に検討していく必要がある。この点についても、今後の研究の蓄積の中で検討を続けていきたい。

「問題と目的」で述べたように、「健やか親子21」(第2次)では、育てにくさを感じる親に寄り添う支援が重点課題として掲げられている。親が育てにくさを感じると、子どもへの望ましくない対応につながる可能性も考えられることから、支援者の目は、子どもの問題や親自身の問題など、個々に表面化した課題への対応や原因探しに向きやすい。これに対して本結果が示したのは、子ども対応の難しさから波及する夫婦ペアレンティングの循環的な家族内影響関係の存在であった。育てにくさを感じる親に向けては、相談の場に居合わせない家族メンバーとの関係や家族システム全体を視野に入れることにより、包括的な家族支援が行われることが求められよう。

本研究は、科学研究費基盤研究B(24330191, 研究代表者:加藤道代)の助成を受けた。本結果の一部は、31st International Congress of Psychology(2016, Yokohama, Japan)で発表された。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 加藤道代, 神谷哲司. 夫婦ペアデータによる親としての発達意識の検討. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 2016; 64 (2): 55-67.
- 2) 加藤道代, 黒澤 泰, 神谷哲司. 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討. 心理学研究 2014; 84: 566-575.
- 3) 神谷哲司. 乳幼児期から児童期にかけての子どもの成長と夫婦関係. 宇都宮 博, 神谷哲司編. 夫と妻の生涯発達心理学. 東京: 福村出版, 2016: 146-157.
- 4) Cowan PA, McHale JP. Coparenting in a family context: Emerging achievements, current dilemmas, and future directions. *New Directions for Child and Adolescent Development* 1996; 74: 93-106.
- 5) 種子田 綾, 桐野匡史, 矢嶋裕樹, 他. 障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係. 東京保健科学学会誌 2004; 7 (2): 79-87.
- 6) 中島俊思, 岡田 涼, 松岡弥玲, 他. 発達障害児の

保護者における養育スタイルの特徴. 発達心理学研究 2012 ; 23 (3) : 264-275.

- 7) Feinberg ME. The internal structure and ecological context of coparenting : A framework for research and intervention. *Parenting. Science and Practice* 2003 ; 3 : 95-131.
- 8) Gordon I, Feldman R. Synchrony in the triad : A microlevel process model of coparenting and parent-child interactions. *Family Process* 2008 ; 47 : 465-479.
- 9) 平田祐太郎. 養育者および保育者における子どもの問題行動の捉え方と養育者の育児負担感の関連. 九州大学心理学研究 2011 ; 12 : 79-85.
- 10) Jia R, Schoppe-Sullivan SJ. Relations between coparenting and father involvement in families with preschool-age children. *Developmental Psychology* 2011 ; 47 : 106-118.
- 11) Fagan J, Cabrera N. Longitudinal and reciprocal associations between coparenting conflict and father engagement. *Journal of Family Psychology* 2012 ; 26 : 1004-1011.
- 12) 厚生労働省SDQのウェブサイト. <http://www.sdqinfo.com/py/sdqinfo/b3.py?language=Japanese> (アクセス2017.01.17.)
- 13) Goodman R, Scott S. Comparing the Strengths and Difficulties Questionnaire and the Child Behavior Checklist : is small beautiful ? *Journal of Abnormal Child Psychology* 1999 ; 27 (1) : 17-24.
- 14) Matsuishi T, Nagano M, Araki Y, et al. Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) : a study of infant and school children in community samples.

Brain Development 2008 ; 30 (6) : 410-415.

- 15) 森下葉子. 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究 2006 ; 17 (2) : 182-192.

[Summary]

The purpose of this study was to examine the influence of children's externalizing behavior problems and mothers' recognition of fathers' involvement in child-rearing on mothers' coparenting quality and fathers' self-reported involvement. Mothers' coparenting quality was measured based on their encouragement and criticism of fathers' parenting. We used an online questionnaire. Participants were 2,328 sets of parents whose eldest child was between 2 and 17 years old. Covariance structural analysis indicated that children's externalizing behavior problems had a negative effect on mothers' encouragement of fathers' involvement, but a positive effect on mothers' criticism. Moreover, mothers' encouragement of fathers' involvement had a positive effect on fathers' self-reported involvement, although there was no significant relationship between mothers' criticism and fathers' self-reported involvement. These findings suggest that mothers' encouragement of fathers' involvement may stimulate harmonious coparenting ; however, mothers' criticism does not necessarily motivate fathers' involvement. Childrearing support for parents with challenging children is needed from the perspective of the family system .

[Key words]

coparenting, externalizing behavior, father's involvement, family system